

『明けない夜にとらわれて』

著：坂井朱生

ill：三尾じゅん太

「ぐだぐだ言ってる则可愛くねえぞ。焦らすのは適度にしとけ」

「なんだよそれ。別に、焦らしてるわけじゃ」

祐仁はにやにやと笑っている。いかにも、由真のことなどわかっていると言いたげだ。この男のこういうところが、なにより気に入らない。

「だったら天然か、そりゃ」

「天然ってどういう意味だよ」

これは本気でわからず、由真は唇を尖らせて祐仁に訊ねた。

「あー、まあ。おまえにやあてはまらないか」

「だから、一人で納得してんなってば」

「そうやってムキになると、めっちゃめっちゃ可愛くなるなあ」

……ヒトの話を聞け。

「可愛いだの可愛くないだのって言わないでくれる」

「なんで？」

「そういうの好きじゃない」

特にこの男に言われると、露骨に子ども扱いられている気がするからだ。まるで、里にいたときと同じで、侮(あなど)られているようで苛々する。

「おまえ、ツラの話されても平気だったろうが」

「言う相手と場合によるの」

「なーんで俺はダメなんだよ、つつか、おまえまで高橋と同じこと言うか」

黎の気持ちがつくづくよくわかる。他の誰よりもこの男に言われると本当に腹がたつ。態度も物言いもいちいち偉そうな上に、この体格だ。

外見については、由真はそれほどこだわっていない。里の人間に「母と似ている」と言われないうざりは気にもしない。けれどこの男に可愛いと言われると、いかにも下に見られているようで頭にくる。

絶対に、従わせてやる。

侮られる悔しさや頭を押さえつけられる苛だたしさを、この男も感じればいい。

「あんたの言いかたが嫌なんだよ」

「あ？ 下心でも透けて見えるか」

「知らないよそんなの。そうじゃなくて、なんでいちいち偉そうなんだよ」

笑うかますます揶揄ってくるかと思った祐仁は、どうしてか意外そうに目を瞠った。

「そりゃわるかった。これは地でな、昔っからこうなんだよ」

「だから我慢しろって？」

「そうじゃねえけどな。まあ、気にすんなってことだ」

気にしないでいられるか。地だというなら治せばいいのに、当人にその気はないらしい。

「それより、飯だ飯。食うんだろ？ ほら行くぞ」

「どこへ？」

だから、その態度が偉そうだというのだ。どこへ行くとも言わず、由真の返事も聞かない。一方的に宣言されるそれに、由真が従って当然だと思っている態度が癪(かん)に障(さわ)る。

「買いだし」

「……は？」

祐仁の言う「メシ」は、外での食事ではなかった。連れていかれたのは近くにあるスーパーで、ぽんぽんと籠(かご)の中に食材を入れていく祐仁のあとを、由真はぽんやりとついていくだけだ。

「なんか食いたいものあったら入れていいぞ」

「入れていいって言われても、誰がつくるのさ」

「俺に決まってるだろ。他に誰もいねえよ。ああ、おまえにつくらせるとでも思ったか」

「そこまで考えてないよ」

ただ意外なだけだ。籠に入っているのは手をかけなければ食べられないような食材ばかりで、それも簡単な調理とはいかない気がする。

本当につくれるのか、疑わしさについてじっと眺めていると、祐仁がにっと笑った。

「意外か？ 自分で言うがわりと美味いぞ。連中に言うとうるせえから黙ってるがな」

「はあ」

実際に食べてみないことにはわからない。由真は中途半端な返事をした。

「おまえ、飯は」

「適当に」

「適当ってなんだ」

「買ってきたり、ときどきつくるけど」

最初はなにもできなかった。里では使用人が、身のまわりすべてをこなしてくれていたのだ。だが人間界にでてきてはそうもいかない。

当初こそラドナがやってくれたが、ラドナは「私の役割は監視であって、お世話じゃありません」と言って、家事のすべてを由真に教えこんだのだ。

面倒だからと食事は買うか外食ですませることも多いが、そんなわけできなくもない。

「上等。んじゃ、忙しいときはやってもらうか」

「そこまで仕事？」

「言っただろ、雑用だ」

「腕の保証はしないよ。不(ま)味(ず)くて文句言っても遅いからね」

「人につくらせたモンに文句言うほどおちぶれちゃいね一の。まあ、一回つくらせてそこまでヤバかったら二度とやらせないけどな」

それが文句を言うのとどう違うのか微妙なところだ。

だらだらと話しながら買いだしは続き、二人とももの両手にいっぱい食材を抱え、帰路についた。買いものは夕飯に使うものだけじゃなく、祐仁の保存食だの水だのも混ぜっかけていて、ずいぶんと重い。

種族は人間よりずっと力も強く、細く見える由真もこの程度なら造作もない。平気で抱えあげている由真に、「ずいぶん力があるんだな」と驚かれたのには冷や汗がでた。

「男だから、これくらいあたりまえじゃない」

誤魔化そうとどうにか言って、怒ったふりをしてみせる。

「あー、どうだかな。そういや、高橋もあれで結構力あったなあ。おまえら、顔はぜんぜん違うのに結構似てんのか」

「かもね」

黎といると気が楽なのは、そのせいかもしれない。似ていると言われて、そんなものかと思う。

「ま、助かるけどな。これで重いモンも持たせられるってわかった」

「あんまりコキ使われたら逃げるよ」

「ほどほどだ。安心しろ」

この男といて安心できるなどあり得ない。——餌にするまでは、だが。

餌にしたら、さてなにをさせよう。もちろん、栄養をもらうだけなんてそんなもったいないことはしない。

だいたいが祐仁を餌にしたいのは彼が気にいったのではまったくなく、むしろ逆だ。気にいらぬから従わせてやりたい。それだけのことだ。

美味いと自称していた料理の腕はどれほどのものか。実のところまったく期待してはいなかったのだが、いざしあがった料理を食べてみると、驚くほど美味しかった。

驚いたものの、口にはださない。けれど表情にはでてしまっていたらしい。祐仁はにんまりと笑い、「だから美味いと言っただろう」と嘯(うそぶ)いた。

「まあ、それなりに」

「素直に褒めろっつもの。がつつ食ってるくせに」

「そんなにがつついてないよ」

「言葉のアヤだろ。そこは流せ。不味いモン食ってる顔もしてねえし、さっきから手が止まってないだろうが」

ほら、と、由真の皿を指さされ、目元がじわっと赤くなった。皿の上にあるメインのビーフストロガノフはもう八割方なくなっており、添えられた温野菜も、バターとガーリックを利(き)かせた米飯も似たような有様だ。

「もっと食うならまだあるぞ」

「……いい」

「遠慮すんな。そんだけ食ってもらえりゃつくり甲斐があるってことだろ。どうする」

由真は迷ったが、黙って皿をさしだした。

グラスに入っていたミネラルウォーターが空になる。ボトルから注ぐかとテーブルの上のそれを掴むと、祐仁は「ちょっと待ってな」といったん席を外す。戻ってきた彼は、赤ワインのボトルとグラス二つを抱えていた。

「酒は呑ませないんじゃないの」

「大勢いるから、一応な。方便ってやつだ。呑めないなら無理すんなよ」

祐仁は言って、赤ワインの栓(せん)を抜く。

「子ども扱いされるの、好きじゃないって言っただろ」

「つっても十九だろ？ まだ」

「そうだよ」

本当は違う。けれど、祐仁には言えない。由真が頷くと、彼はふっと苦笑を浮かべた。「あのなあ。別に酒が呑めるからってオトナってんでもないだろうが。無理して突っぱったって、どうにもならねえよ」

知らないくせに。いちいち突っかかる自分もどうかしていると思うのだがやめられない。とにかく、この男の言葉はどうしても流せないのだ。

本文 p68～74 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>